

正村和也作 「おれとあいつの物語 第2章 祈り」

<前編>

遠山優次(ナレーション) おれとあいつはひょんなことから知り合った。おれが幼なじみの今日子にフラれた日。しかも、ほおに平手打ちまで食らった現場を、あいつに見られたのだった。でもあいつは、妙に優しく、やけに誠実だった。あの時からおれとあいつは友達になった。あいつの名前は内田道男。何とクリスチャンだ。そして事もあろうに、あいつの家は教会で、あいつの父親はその教会の牧師をしている。おれはそこでイエス・キリストという人の話を聞いた。イエスは、人となった神の子で、おれのことを愛していて、おれの罪の身代わりとなって十字架につき、死んだのだという。「罪」ってなんだ？ おれがどんな罪を犯したというんだ？ おれには分からなかった。

優次 道男、おれ、来週の日曜日、また来るわ。

ナレーション おれは思わず、あいつと約束していた。言葉ではうまく言えないけど、おれはあいつが信じているイエス・キリストのことがもっと知りたかった。そしておれが犯しているという「罪」についても。

おっと、おれの紹介がまだだった。おれの名は遠山優次。大学4年生。周りは“就職、就職”って、青い顔して騒いでるけど、おれは自由を求めて“フリーター宣言”をした。だけどあいつと出会って、おれの中の何かが変わり始めていた。すごく大事な何かがかめそうな気がしていた。言うなら“心の旅”の始まりだ。おれは次の日曜日、教会の“礼拝”というものに生まれて初めて出席した。

(礼拝終了後)

司会者 ではこれで今日の礼拝を終わります。ご自由にお交わりください。

佐伯研三 こんにちは。よくおいでくださいました。歓迎します。わたしは佐伯、佐伯研三といいます。それから、これは娘ののぞみです。どうぞよろしく。

のぞみ 望みです。よろしく。

優次 あ、おれ、遠山優次といいます。あの、おれ、遅れてきて何か面倒かけちゃって。すいませんでした。

研三 いえいえ、とんでもない。何か分からないことがありましたら、遠慮なくおっしゃってください。

優次 はあ、ありがとうございます。

のぞみ あの、お仕事されているんですか？

優次 いや、学生です。大学生。

のぞみ わたしも。わたし、今2年です。何年生ですか？

優次 4年です。

のぞみ え？ じゃ道男さんと同じだ。

優次 そう、おれ、道男と同じ大学なんです。

のぞみ えー。じゃあ、道男さんに誘われてきたんですか？

研三 こら、のぞみ。そんなに質問攻めにしちゃあご迷惑だぞ。

のぞみ はあい。

内田道男 遠山君！

優次 よお、道男。

道男 来てくれたんだ。

優次 だって、約束したろ、この間。

道男 うん。

優次 でもさ、おれ、寝坊して、随分遅れてきちゃったんだ。それにしてもお前がオルガン弾けるとはな。驚いたよ。すげえなあ。

道男 そんなことないよ。小さいころから無理やり練習させられたんだ。

優次 へえ。

のぞみ 道男さん。お友達、来てくれてよかったね。

道男 うん。

のぞみ じゃあ、優次さん、道男さん、また。(去る)

道男 うん、じゃあね。(優次に)それより、遠山君。

優次 優次でいいよ。

道男 うーん。優次君。

優次 …

道男 じゃあ、優ちゃん。

優次 呼び捨てでいいって。

道男 勝手に分からなくて大変だったでしょう。

優次 まあな。でも、さっきの人、佐伯さんっていったっけ？

道男 うん。

優次 佐伯さんが、いろいろと教えてくれたから。

道男 聖書の話は、どうだった？ 分かりにくかった？

優次 ああ、まあな。

ナレーション 正直言って、道男の父である内田牧師の語った聖書の話は難しかった。イエスがおれを愛していて、おれの「罪」の身代わりとなってくれたとは、実感としてどうしても思えなかった。

優次 道男、おれ、帰るわ。

道男 え、もう帰るの？

優次 ああ。おれ、今からバイトの面接なんだ。

道男 (落ち込んだ様子で) そうなんだ。

優次 何だよ、そんな暗い顔するなよ。来週もまた来るよ。(子供たちを見て)なあ道男、あれ、何してるんだ？

道男 ああ、あれは子供たちにお祈りしてあげてるんだ。

優次 お祈り…？

子供 先生、お祈りしてえ。(子供数人も口々に)

内田牧師 はい。じゃあお祈りして欲しい人は、1列に並んで。

子供全員 はい。

子供 先生、僕、今度の火曜日、学校のサッカー大会なんだ。シュートが決められるようにお祈りして。

内田牧師 よし、お祈りするよ。天のお父様。今週も啓太君をお守りください。火曜日のサッカー大会の時も、ケガなどしませんように。そして、日ごろの練習の成果が十分に発揮できますように、お導きください。イエス様のお名前によってお祈ります。

子供 イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

ナレーション おれは、この光景を見て複雑な思いに捕らわれていた。イエスを信じて祈り求める子供たちの純真な姿に、あこがれを感じながらも、困ったときの神頼みみたいで、そんな弱い人間にはなりたくないという思いもあった。それでも日曜日になると、何かに引かれるようにして教会に足を向けた。平日は、毎日工事現場のアルバイトをしたが、肝心の大学には、今日子にフラれて以来、あまり行かなくなった。何となく今日子と顔を合わすのがつらかったし、就職活動をしている友達と話をするのがおっくうだったからだ。それでも心の中では、何となく学校の様子が気になって、ある日、おれは久しぶりで大学に顔を出した。

友人① おい、あれ優次じゃないの？

友人② あ、本当だ。

友人① 随分日に焼けてるなあ。

友人② うん、前より人相が悪くなった感じだね。

まゆみ 優ちゃん！

優次 (けだるそうに) ああ、お前ら元気かよ。

まゆみ 優ちゃんこそ、元気なの？ 随分久しぶりじゃない。優ちゃん、講義、全然受けてないんでしょ？ 単位、大丈夫なの？ 卒業できなくなっちゃうよ。

優次 ああ、大丈夫だよ。まあ適当にやるからさ。それよりお前、人のことよりさ、自分のこと心配しろよ。

まゆみ (怒って) そうはいかないわよ！

優次 何だよ、急に。

まゆみ 今日子がね、心配して落ち込んでいるの。すごい落ち込みようなの。わたしはね、はっきり言って優ちゃんがどうなろうと関係ないわ。だけど、今まで一生懸

命やってきた今日子が、この大事な時期に落ち込んで、ダメになっていくのを見てられないの！

優次 ちょっと待てよ。おれはさ、今日子にフラれたんだよ。何でフッタ今日子が落ち込んで、ダメにならなきゃいけないんだよ。

まゆみ そんなの、わたしにも分からないわよ。だけど、「優ちゃんがこうなったのは自分のせいだ」って思い込んでいるのよ、今日子は。それで就職試験も、受けるところ受けるところ全部ダメで、後は本命ともう1社しか残ってないのよ。心配じゃないの、優ちゃん？

優次 …。(ショックを隠せないように)心配じゃないわけないだろう。まゆみ、今日子に伝えてくれよ。「お前のせいじゃないから」って。「おれは大丈夫だから、残りの2社頑張れよ」って。それから、お前も頑張れよ。じゃあな。

まゆみ 優ちゃん…。

ナレーション ものすごいショックだった。何でこんなことになってしまうのだろうか。今日子は、翻訳の仕事をするのが夢なのだ。そのために人一倍努力をしてきた。それは、ほかのだれよりもおれが一番よく知っている。それなのにどうして？ やりきれない思いだった。おれはただ、これからは自分だけの力で歩いてゆきたい。いや、歩いてゆかなきゃと思ってただけなのに。おれは今日子のために何ができるのだろう。必死に考えたけど、答えは見つからなかった。思い余っておれは、道男に電話をかけた。

(効果音) (電話の呼び出し)

道男 ((効果音)(フィルター)はい、内田です。

優次 あ、もしも、おれ、優次。道男？

道男 (フィルター)え、優ちゃん？ 珍しいね。どうしたの？

優次 ああ、実はさあ…。

ナレーション おれは、事のいきさつを道男に話し、おれには何ができるのか、おれはどうすべきかを尋ねてみた。道男は、穏やかで落ち着いた口調でこう言った。

道男 (フィルター)祈りましょう。僕も祈るから優ちゃんも祈ってみて。

優次 祈るって、おれ、クリスチャンでもないし、祈り方なんて分からないよ。

道男 大丈夫。神様はわたしたちを等しく愛しておられる。だから、必ず最善に導いてくださいます。優ちゃん、つらいだろうけど頑張ろう。

ナレーション おれは、いつもは何となく頼りなげな道男の、確信に満ちた言葉に驚いていた。続けて道男は、受話器の向こうで祈ってくれた。

道男 (祈る)植村今日子さんの上に、あなたのお守りがありますように。そして最善の道をお与え下さいますように…。

ナレーション おれは、初めて教会に行った時に見た、あの子供たちの純真な姿を思い起こし、心の中で道男と一緒に祈った。“今日子が、本命の会社に入れますように。”そ

の日から、おれは毎晩そう祈ってみた。そんな祈りの日々がどれくらい過ぎた
だろうか。バイトから帰ると、留守番電話にメッセージが入っていた。

(効果音) (テープのスイッチ。巻き戻し音。)

アナウンス (女声機械音) ヨウケン1ケン、サイセイシマス。

まゆみ ((効果音)(フィルター)もしもし優ちゃん？ あたし、まゆみ。今日子が大変な
の。入社試験全部ダメだったの。とにかく、帰ったら電話ちょうだい。絶対だよ。

アナウンス (女声機械音) サイセイガオワリマシタ。

ナレーション おれは、受話器を握り締めたまま、立ち尽していた。目の前が真っ暗になった。
こんなことがあっていいのだろうか。怒りが込み上げてきた。あんなに一生懸命
だったのに。神様はどうしておれの祈りを聞いてくれなかったんだ？ 恨みがまし
いい気持ちで、心の中がいっぱいになった。この時のおれは、神からも、その
一人子というイエス・キリストからも、最も遠いところにいた。

<後編>

まゆみ ((効果音)(フィルター)もしもし優ちゃん？ あたし、まゆみ。今日子が大変な
の。入社試験全部ダメだったの。とにかく、帰ったら電話ちょうだい。絶対だよ。

ナレーション 留守番電話に入っていたまゆみからのメッセージだ。おれはあいつに、内田道
男に勧められて、幼なじみの今日子のために祈ってきた。でも、おれの祈りは
聞かれなかったのだ。なぜ？ どうして？ あんなに一生懸命祈ったのに。怒り
と、恨みがましい気持ちでおれの心はいっぱいだった。おれは、イエス・キリス
トに愛されていないんだ、いや、イエスなど生きてやしないんだ、とも思った。この
時のおれは、イエスから最も遠いところにいた。とにかくおれは、まゆみに電話
をして、詳しいことを聞いた。今日子は相当激しく落ち込んでいるということだっ
た。おれは直接励まそうと思い、今日子の家に電話をかけた。

(効果音) (電話の呼び出し)

今日子の母 はい、植村でございます。

優次 (効果音)(フィルター)あ、おばさん。こんばんは、優次です。

母 あら、優ちゃん？ まあ、珍しい。お久しぶりねえ。

優次 (フィルター)はい、ごぶさたしています。あの、今日子さんいますか？

母 はいはい、ちょっと待ってね。(遠くに)今日子、電話よー！

今日子 (電話口に出て、母と)だれ？

母 優ちゃんよ。

今日子 イヤだ。出たくない。

母 でも、あなたのことを心配して、かけてきてくれたんじゃないの？

今日子 だれが心配されるような状態にしたと思ってるの？

母 人のせいにするのはやめなさい。

今日子 でもイヤ。絶対に出ない。

母 はいはい、分かりました。(受話器に) 優ちゃん、ごめんなさいね。今日子、出た
くなくって言うてるの。

優次 (フィルター) そうですか。

母 本当にごめんなさいね。あの子、就職が決まらなくて相当参ってるみたいなの。

優次 (フィルター) そうですか。じゃあまたかけます。おれが謝っていたと、元気を出
すように言っていたとお伝えください。

母 はいはい、伝えておくわね。

優次 (フィルター) じゃあ、失礼します。(受話器を置く音)

ナレーション 居たたまれない気持ちだった。何か、取り返しのつかないことをしてしまったよう
な、そんな後味の悪い思いだった。おれは一体どうすればいいのだろう。出口
のない迷路の中をさまよっているような気分だった。

優次モノローグ おれは今日子にフラれたんじゃないかったのか？ おれだってあの時、傷ついた
んだ。それでもおれは、今日子のためにあんなに一生懸命祈ったじゃないか。
でも今日子の就職試験は結局ダメだった。何だよ。もしやと思って素直にあい
つの言うとおりにしたのに。

ナレーション そのうち、おれの中には、次第に道男に対する怒りが込み上げてきた。あいつ
を責めるのは少々の外れだという気はしたが、この怒りは自分ではどうしようも
なかった。

優次 (効果音)(玄関のブザー) ごめんください。(ブザー) ごめんください！

内田牧師 はいはい、今開けますよ。(効果音)(ドアの開く音) ああ、優次君。どうしました、
こんな時間に？

優次 あ、先生。あの、道男、あ、いや、道男君いますか？

内田牧師 もう帰るころなんですよけどね。まあ、とにかくお上がりなさい。

優次 はい。じゃあ失礼します。

内田牧師 コーヒーでも入れましょう。道男に何か相談ですか？ わたしでよければ先に伺
いますよ。遠慮なく何でも言ってください。

ナレーション 内田牧師の柔らかな態度と、親しみのある笑顔に、おれはすっかり氣勢をそが
れ、コーヒーを飲みながら、いつしかこれまでの今日子とのいきさつをすべて話
していた。

内田牧師 …そうですか。それは本当に大変なことですねえ。あなたも、その今日子さん
自身もおつらいことでしょうねえ。

優次 先生。おれ、道男に勧められて、今日子のために、一生懸命祈ったんです。で
も聞かれなかった。神様は、クリスチャンでも何でもないおれなんかの祈りは、
やっぱり聞いてくれないんですね。

内田牧師 優次君。聖書にはこう書かれていますよ。「天の父は、悪い人にもよい人にも太陽を昇らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。」(マタイ5:45)いいですか、優次君。あなたも今日子さんも、もちろんわたしや道男も神様がおつくりになったんです。神様は、みんな等しく愛してくださっているのです。わたしたちクリスチャンは、そのような神の愛を知り、人の目にはつらく思えることも、すべては神様が与えてくださる恵と受け止め、信じて、神様に感謝できるようにしていただいた。それがなかなかできず、すぐに他人と比べて、うらやんだり、ひがんだり、そのうちに相手のせいにして恨んだりする。これが人間の“自己中心”の罪なんですね。神の一人子のイエス様は、その罪の身代わりに死んでくださったのですよ。

優次 はあ…。

内田牧師 優次君。道男がまだ小学生だったころ、こんなことがありました。道男の母親、すなわちわたしの家内は、非常に体が弱くてね。入退院を繰り返していました。わたしが教会の仕事で忙しく、また病院に付き添うことが多かったので、寂しかったんでしょう。道男はある日、捨て猫を拾ってきて、飼い始めました。しかしその猫が、交通事故に遭ってしまったんです。獣医さんに手当てをしてもらい、道男は一生懸命看病していました。そして、泣きながら必死に祈っていました。

道男 父さん。そこから先は僕が話すよ。

ナレーション それは、いつの間にか帰ってきていた道男だった。

道男 僕は必死に祈ったよ。学校も休んで、ずっとそばにいて祈った。でも3日目の夜、とうとう死んでしまった。その時は神様を恨んだよ。「どうして僕から何もかも取り上げるのですか？ 母さんも、父さんも、そしてミケまでも」って。何日も泣いて過ごしているうち、ふと大切なことに気づいたんだ。母さんは家にいることがあまりなくて、僕は寂しかった。そして僕は自分が被害者のように思ってたんだ。でもそれは大きな間違いだった。僕は、母さんのことをあのミケ以上に大事にしてくださいませんか。母さんのためにこれほどまでに祈っただろうかって。そのことに気づかせてくれたのは、やっぱり神様だったんだ。その母さんも、中3の時に天国に行ってしまったけど、この事があったから、精一杯母さんの世話をすることができたし、感謝することもできたんだ。

内田牧師 そうだったねえ。あのミケが命と引き換えに、大事なことを教えてくれたんだねえ。優次君、神様は、時を選んで必ず最善に導いてくださる方です。そして、すべてのことを益に変えてくださるんです。今日子さんのことも、もう一度神様にお任せしてみませんか？

ナレーション 雷に打たれたようだった。淡々と話すあいつと内田牧師の言葉の、どこにあんな力があるんだろう。おれの全身に、心を引き裂かれるような痛みが走っていた。今日子に対しても、道男に対しても、おれは、罪悪感と恥ずかしさでいっぱい

いだった。おれは、なんでも人のせいにして、自分を守ろうとしてきたのではないだろうか。心の中に、今はっきりと自分の「罪」が示されている。そして、おれはそんな罪深い自分の「心」をどうすることもできないでいる。

優次モノローグ イエス様、こんなどうしようもないおれを愛してください。イエス様、こんな罪深いおれを救ってください。イエス様、お願いします。救ってください。

ナレーション 家に帰ると、おれは祈りにならない祈りを叫んでいた。その時、真っ暗な部屋の中、留守番電話のメッセージを知らせる、オレンジ色のライトが点滅しているのが目に付いた。

(効果音) (テープのスイッチ。巻き戻し音)

アナウンス ヨウケン1ケン。サイセイシマス。

今日子 (フィルター) 優ちゃん。今日子です。さっきは電話ありがとう。でも出なくてごめんなさい。だけど、優ちゃんがまだあたしのこと心配してくれてて、うれしかった。優ちゃん、ビッグニュースがあるので電話しました。あたし、ボストンに留学することになりそうです。お父さんの親友があっちにいて、小さな出版社をやってるそうです。そこで働きながら、向こうの大学で学ばせてもらえるのだそうです。何か夢のようです。いろいろ心配かけてごめんなさい。優ちゃん、ありがとう。お休みなさい。

アナウンス サイセイガオワリマシタ。

ナレーション “神様は、時を選んで最善をお与えになる。”内田牧師の言ったことは本当だった。神様は、おれのちっぽけな願いをはるかに超えた、大きな恵みを与えてくださったのだ。神のみ子イエス・キリスト。おれの必死の祈りを神様に届けてくれたイエスは、確かに今も生きているのだということをおれは実感した。あいつが祈りを勧めてくれた時の確信の秘密は、これだったんだ。

優次モノローグ 道男、おれもイエス様とともに生きていくよ。

ナレーション おれはそっとつぶやいた。それは、イエスが一番身近に感じられた夜だった。

(完)